

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 14 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530683

研究課題名（和文） undecided型の進路未決定者のリラクタンシーおよび自己との適合希求の解明

研究課題名（英文） Reluctance of Career Exploration and Eagerness for Fit with Alternatives for Undecided Students.

研究代表者

若松 養亮（WAKAMATSU YOUSUKE）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：50273389

研究成果の概要（和文）：

大学生の進路意思決定には、興味や価値観などの人格的な側面が大きな影響を与えていた。しかしそればかりが突出した考え方で進路を決めようとするのは、進路探索行動を伴わず、意思決定が遅延する可能性が高い。彼らが重視する適合の観点は、就職活動を経てもなかなか変化しない傾向があるだけに、就職活動以前にどのように彼らの思考や探索行動を方向付けるかが重要である。

研究成果の概要（英文）：

Career decision making of university students is mainly affected by personality aspect such as interesting or value. But if they respect to the aspect only, they tend not to explore their career well and to be undecided. They tend not to change their criterion through their job-hunting activities, so it's important to orient their plan, thought, or exploration behavior before the activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：キャリア心理学

科研費の分科・細目：心理学、教育心理学

キーワード：学生相談、大学生、進路未決定、動機づけ、自己との適合

1. 研究開始当初の背景

大学生の進路意思決定遅延に関しては、来談が慢性化する卒業延伸者ではなく、一般の学生（undecided型未決定者）がなぜ、どのような困難さに直面するのか、またどのように支援すれば決められるかの知見が十分得られていなかった。筆者のこれまでの研究から、彼らは、意思決定に対して特定の困難さ

を感じて決められないのではなく、自分に合った進路が見いだせず、したがって既存の選択肢に決めずにいること、その反面、進路探索行動は内省的な沈黙考型のもものが中心で、実際の・現実的な探索・検討に二の足を踏んでいること（気が進まないこと＝reluctancy; リラクタンシー）が課題であることが判明した。

彼らのほとんどは、卒業までに進路を決めているとはいえ、決める過程においてはなかなか決め手ときっかけがないままに探索行動を先送りにし、合同説明会や採用試験が近づくとなかばなし崩し式で方向を決めたり、見切り発車の形で採用活動に出向く。あるいは就職活動の過程ですべての選択肢を失うことで、なかば行き当たりばったりにエントリーしてしまう。本研究では、学生の未決定自体を問題とするのではなく、このように意思決定の遅れが質の低いキャリア選択につながることを問題にする立場に立つ。したがって、未決定者だけを問題にするのではなく、遅れはしないものの、十分な検討を経ずになされた意思決定も問題視することから、大学生によってなされる進路意思決定全体の質を向上することを目標とする。

2011年度より、大学におけるキャリアガイダンスが義務化されたことにより、このような研究は時代的な急務でもありと考えられる。

2. 研究の目的

以上の背景から本研究では、一般学生の進路未決定（意思決定の遅延）に対して支援を行い、同時に未決定者以外に対しても意思決定の質を向上させるために、(1)彼らが「自分に合った進路である」と判断する観点や基準を明らかにし、(2)そのことと意思決定遅延の関連を明らかにすること、また(3)彼らのリラクタンシーのメカニズムを解明することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

大きく以下の3つからなる。

(1) 質問紙法調査

教員養成学部学生へのものと、非養成系の文科系学部に対するものとして併せて3回の量的調査を行った。第1回の調査は教員養成学部生を対象としたもので、最も目指す気持ちが強い選択肢を想定させて、こちらが提示した観点・基準にその選択肢がどの程度合っていると思うかを尋ねる設問が中心である。有効回答数は2年度分で325名であった（調査1とする）。第2回の調査は同じく教員養成学部生を対象として、こちらが提示した観点・基準それぞれがどの程度重要であるかを評定させる設問が中心であった。有効回答数は167名であった（調査2とする）。第3回は非養成系の文科系学部生を対象としたもので、前2回の観点・基準を整理したうえで多面的な評定をさせる設問が中心であった。具体的には、最も目指す気持ちが強い選択肢を想定させて、その選択肢の内容理解、能力、興味、実現可能性、正確・価値観の5つの観点に対して、①自己評価、②評定①への確信、③評定①への納得、④この観点の重要度評定

の4種類の評定を求めた。併せてその観点への志望度も段階評定させ、主として志望度と各観点・各評定との関連を分析した。有効回答数は236名であった（調査3とする）。

(2) 4年次生への面接調査（調査4）

就職活動や採用試験を終えた4年次生に協力を依頼し、面接法による調査を行った。主な内容は、自己と職業の選択肢との適合に対する見方・考え方がどのように変わっていったか、それは就職活動のプロセスとどのように関わっていたか、また探索活動のリラクタンシーはどのようなものであり、最終的にそれはどのように克服されたか、されなかったとすれば足りない部分をどのように補ったか、といったことであった。対象者は5名であった。

(3) 3年次生への意思決定支援

3年次の10月時点で意思決定が未了である3年次生のうち希望する人を対象として、複数回にわたることも許容する形での意思決定支援を行った。その過程で彼らの未決定の内情を把握し、同時にこちら側からの支援に対する彼らの反応や、意思決定への影響を把握することが目的であった。対象者は8名であった。

4. 研究成果

以下に主たる成果を、それぞれの調査・データごとに列挙し、成果を述べていく。

(1) 調査1の結果から

提示した観点・基準のうち、最も特筆すべきであったのは「人格面」と命名された下位因子であり、「楽しくやっていけそうか」、「興味」、「価値観」といった項目から構成されたものである。この因子は、他の「働き方」「周囲からの期待や制約」「能力面」といった他の因子とは異なり、意思決定に対する確信や心配の少なさといった質的な評価に対して一貫して正の関連をもち、調査時点までに意思決定できた人が「特にどの点が合っていたから決めたか」という問いに対して挙げた項目が多く含まれていた。また意思決定プロセスの順調さの尺度を構成する5つの下位因子を目的変数として行った重回帰分析では、この「人格面」で適合していると評定することが一貫して順調さと正に関連していた。

他方、未決定者たちは想定している選択肢に対して、人格面で低く評定しているわけではない。むしろ「働き方」や「能力面」での不適合が目立ち、教職を想定している人たちは特に「働き方」での不適合を挙げる人が多かった。すなわち彼らは、興味がある、楽しそうという選択肢が見いだせないのではなく、そうした選択肢を想定はできても、他の条件で適合を感じられない傾向にある。

続いてリラクタンシーについては、未決定者が停滞している様相の下位因子「手詰まり

感」、「楽観視」、「気の進まなさ」の得点を用いてクラスタ分析を行い、4クラスタ解が得られたので、それを手がかりに分析を進めた。リラクタンシーはこのうち、すべての因子得点が正である「放置群」（未決定者の34%が該当）と、「手詰まり感」は負であるのに「楽観視」、「気の進まなさ」がともに正である「先延ばし群」（同16%が該当）の2つの群で問題になると考えられる。これらの群の特徴を調べると、放置群は現在の大学・学部で第1志望で入った人の割合が高かった（69%；先延ばし群は36%）が、だからといって教職を選択肢として想定していた人の割合に有意差は見られなかった。他にこの両群で差が見られたものはほとんどなく、むしろこの2群は手詰まり感・楽観視・気の進まなさをいずれも低い「順調群」（同16%が該当）よりも進路選択行動への関与が低く、探索行動も少ないことが判明しただけであった。尤も順調群も決定者群と比べると意思決定への確信も低く、選択肢への適合感も低かった。

(2) 調査2の結果から

どのような観点を重要視するかについての評定を求めたものを因子分析によって類型化すると、「仕事内容における適合」と「働き方における適合」という二大因子が多数の項目が寄与する形で抽出され、後は「大学での専門」、「安定性」、「快感情」それぞれにおける適合という各論的な因子であった。

このうち「働き方」の観点は教職を選択肢として想定していない人において、また「大学での専門」の観点は教職を想定している人において、より重要と評定されていた。

特に重視する観点を3つまで挙げてもらったが、その項目がどの因子のものであるか、および決定・未決定、教職の想定・非想定を説明変数として行った数量化I類の分析では、これまでの進路選択に対する納得の程度を目的変数とした場合には、未決定でないこと、「働き方」を重視すること、「大学での専門」を重視すること、「快感情」を重視しないことが関係していた。また自身の進路選択について心配していないことを目的変数とした場合には、未決定でないこと、「仕事内容」を重視していないこと、「働き方」「大学での専門」を重視することが関係していた。

意思決定のプロセスとの関連を見たところ、「働き方」を重視している人ほど、入学後の問い直し経験が多く、早期からの見通しがないことがわかった。早期からの見通しをもつことは、「大学での専門」を重視することと関係があることもわかった。

リラクタンシーに関して、探索行動の頻度と関連を見たところ、「仕事内容」を重視している人ほどいずれの種類の探索行動も多いことがわかった。

(3) 調査3の結果から

最も目指す気持ちが強い選択肢を想定させたうえで尋ねた5つの観点への自己評価を尋ねると、「興味」は最も高い評定5への偏りが著しかったが他の観点はそうではなく、「選択肢理解」「能力」は評定5が20%前後しか見られなかった。自己評価間の相関をみると、志望度の評定は興味と最も高い相関（.484）であり、「能力」「実現可能性」「価値観・性格」とは0.2にも至らない相関であった。特に能力や実現可能性の高低とは関係ないところで志望されていることになる。志望度の自己評価に対して5つの観点への評定で重回帰分析を行うと、標準偏回帰係数 β が最も高いのは「興味」（ $\beta=.42$ ）であったが、他に β が有意になったのは「選択肢理解」（ $\beta=.25$ ）のみであった。すなわち、興味がより強く志望度と関連はするが、選択肢を十分理解することが志望度の強さに関係している。

5つの観点の自己評価評定によってクラスタ分析を行い、4つのクラスタを得た。このうち「興味」と「性格・価値観」のみが評定3.0を超えている「人格面主導群」（全体の18%）において未決定者の割合が61%と最も高く、それまでの進路選択に対する納得の感情も低かった。また彼らは、大学入学時点の進路の見通しを持っている人も少なく、長期間にわたる選択肢の検討もしていない。また探索の行き詰まりと気の進まなさも高く、その意味ではリラクタンシーと結びついた群であると言える。現に探索行動の少なさは4群中、群を抜いて低かった。

(4) 調査4の結果から

対象となった4年次生はすべて教員採用試験を受験しなかった人たちであるが、教職を当初からまったく考えていなかったわけではなかった。ただ教育実習やその他の経験を経るなかで、自分に適合しないとして結果的に退けていた。それは大きくは忙しい、大変な仕事であるという負担の量的な面からというケースと、質的に見て自分の人格や技量が及ばず「私は教壇に立てる人間では（まだ）ない」というケースが見られた。尤も対立候補として考えた選択肢に対して同程度に詳しく、また現実的に検討を加えていたかという点、それほどなされていない印象を受けた。

他方、教職以外の進路に選んだものが彼らにとってどのように適合していたかについては、すべてのケースにおいて「やりたいことができるのか」という興味ある仕事内容についてであった。これは調査1において述べた「人格面」の特異性と符合し、また調査3の興味と志望度のリンクとも符合する。他方、「働き方・労働条件」の観点に対しては、当初は希望があったものの、二の次という印象

であった。ただし、「先のことを見通して働いているなら土日が休みだといいと思ったり、3年で辞めるなら土日なしでずっと働いていてもいいと思っていた」というように、他の条件によっても変わるという考え方も聞かれた。

就職活動を経た彼らは、自分がそれぞれの企業に適合しているかどうかを自分の見立てだけではなく、相手から得られる反応を通して感じていた。例えば採用担当者からのフィードバックや面接時の雰囲気などである。他にも、採用に当たっていた社員から企業風土を推測するなどのことはしており、多面的な適合性の判断をしていると考えられる反面、それが実際に働き始めてからの程度適切な判断と感じられるものかには疑問が残った。

ところで就職活動の事前から事後にかけて、適合の観点・基準が変化することを予想していたが、今回の対象者からは、その変化についての自覚的な報告は聞かれなかった。これには、(1)回想的な報告をデータとしたこと、(2)就職活動が終了してから、またケースによっては半年以上経ってからの聞き取りであること、(3)実際にそれほど変化していない可能性、(4)対象とした学生は比較的順調に就職活動を終えていることからくる特異性、という4つの可能性が考えられる。

探索行動のリラクタンシーについては、就職活動サイトや企業のサイトを見てみても、それで何がわかるんだ、社風についてもこのものを読んで同じであるように感じたなど、提供されている情報の内容面に関わって、情報探索の不全感が複数から聞かれた。彼らが情報を収集し、実際の就職活動に対して大きな前進となる契機となるのは、やはり説明会であり、多くの場合、合同説明会のものであった。しかし「良い」「合っている」という判断はどうしても第一印象に引っ張られたものとなりがちであろうし、彼らが就職を避けたという、例えば量的に大変な仕事という理由が、企業の選択肢では十分に検討されていないのではないかという危惧は決して小さくない。

(5) 意思決定支援研究から

就職活動を控えた3年次生は、前項で報告した就職活動を終えた4年次生に比べて、やはり判断や思いが稚拙な部分が見られた。それは志望する方向性が趣味など個人的な愉しみの領域であったり、自分の望む条件を譲歩しないために行き詰まっていたりするなどである。他にも「自分に本当に合った進路を選びたい」、「ずっといるところを選ぶ」という前提で考えるなど、求める適合性の水準を自分から引き上げて考えてしまっているなど、意思決定の遅延と関わる思考・判断のいくつかに気づいた。

また選択肢を仕事内容と結びつけて考えられるような魅力的なところに出会っていないためか、勤務地や勤務時間、休みといった労働条件に偏向した判断をしている人も複数見られた。

以上述べてきた稚拙な思考・判断や労働条件への偏向といった彼らの特徴は、より多くの進路情報に触れて、その“相場”を知ることによって緩和できると考えられる。筆者との面接の形で支援を受けた彼らには、言語的な情報でしかないが、その“相場”を知らせてやり、そうしたことを勘案すると、最も妥当と考えられる選択肢は〇〇である、との説明に納得していたようであった。

リラクタンシーに関しては、ちょっとインターネットで調べれば、あるいはちょっと尋ねに行けばわかるようなことについても調べていないなど、やはり未決定者においては少なからず見られた。そのうち一人からは、「今まできっかけがなかった」という発言が聞かれた。若松(2008;平成17~19年度科研費報告書)では、未決定者のペースメイクを行うことが効果的であると論じたが、支援ではそうしたことができて、支援の効率を考えると、どのようにすれば彼らが自発的に契機を見いだして探索行動を行うかが検討されなければならないだろう。

また本研究の対象者は、量的調査の際に参加者を募る形をとったが、そのせいか、indecisivenessの傾向が中程度以上の人が何人も見られた。すなわち不安傾向が強いため、他者からの支援を求めて参加したという構図かもしれない。

(6) まとめ

彼らが考える「自分と合っている」という適合は、「やってみたい」という興味を主としたものであり、それが「楽しく仕事ができそう」という趣味的感覚から由来するものであることも想定されることから、時期的に遅延せずに意思決定した人たちにおいても、その意思決定の質が問われる。また未決定者においては、そうした興味主体で考える人たちの意思決定は探索行動を伴わないものであるだけに、進路に対する考え方・決め方から含めて、支援の目標にしなければならない。

他方リラクタンシーに関しては、就職活動を実際に始める以前のものに関しては、インターネットに掲載されている情報から実質的な検討に入るだけの、選択肢を差別化する情報が得られないなどのことから、何らかの考える契機や枠組みを与えないと実際的な検討は進まないであろう。ただ、合同説明会などの就職活動の過程で得た感触や方向性は、それが十分に系統的な比較・検討を経ていないだけに、そうした局面での考え方も含めて支援していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①若松養亮 2011 進路意思決定過程による教員養成学部生の類型とその特徴—中学・高校における進路指導の課題を検討しながら— 進路指導, 84(1), 3-12, 査読無.

②若松養亮 2009 進路未決定者像の再検討—本多論文へのコメント— 青年心理学研究, 21, 131-135, 査読有.

[学会発表] (計7件)

①若松養亮 2011.9.16 大学生のキャリア選択における適合性の自己評価と意思決定遅延日本心理学会第75回大会発表論文集, p.238, 日本大学

② Y. Wakamatsu 2011.4.28 Sense of career fitness and decision making process. CDAA International Career Conference 2011, Cairns Convention Center

③若松養亮 2010.9.21 大学生の進路意思決定過程による類型—進路探索行動の多少や遅延の様相との関連もふまえて—日本心理学会第74回大会発表論文集 p.182, 大阪大学.

④若松養亮 2010.8.27 大学生の進路意思決定における適合の判断—3年次生が就職活動前に重視する選択の観点と意思決定遅延の関連— 日本教育心理学会第52回総会論文集 p.292, 早稲田大学.

⑤若松養亮 2010.3.28 進路意思決定遅延の大学生における停滞の様相 日本発達心理学会第21回大会発表論文集 p.643, 神戸国際会議場.

⑥若松養亮 2009.9.20 大学3年秋の進路未決定者に対する集団的介入とその評価(2)—ピアレビューと探索課題具体化の効果を中心に— 日本教育心理学会第51回総会発表論文集 p.226, 静岡大学.

⑦若松養亮 2009.8.27 大学生の進路意思決定遅延をもたらす不適合とは—選択肢に依存しないものと教職の非志向に至らせるもの— 日本心理学会第73回大会発表論文集 p.162, 立命館大学.

[図書] (計1件)

①若松養亮・下村英雄(編) 2012 詳解・

大学生のキャリアガイダンス論 金子書房
175ページ (印刷中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

若松 養亮 (WAKAMATSU YOUSUKE)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号: 50273389

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし